

シリーズ・編集部座談会《こんな話&あんな話》

作業着の《ニューウエーブ》について再び考える①

【出席者＝本紙編集部一同】

☆安全でカッコいい作業着はもちろん好評だが

司会者 作業着については、昨年 11 月最終週の本紙特集でまず取り上げ、さらに翌 12 月には、「《ユニフォーム革命》は若者を引き付けるマストアイテムになる!？」と題する編集部座談会も実施したね。

けれども、また今回、座談会で取り上げることになったのは、B記者からの提案だったよね。まずそのへんの理由を説明してください。

記者B わかりました。実はこれ、C記者と一緒に作業着メーカーをその後また取材する機会がありまして、その際にそのメーカーX社、Y社からうかがった話がキッカケになったんです……。

記者C そうです。本紙の特集においても、また座談会においてもそうでしたが、最近の作業着の《ニューウエーブ》を取り上げる際の切り口として、どちらかという私たちは《ファッション性》に重点を置いていましたよね。

司会者 そうだ、そうだ。最近の作業着はなかなかカッコいいのが多いからな。

記者B 業界の人手不足の解消策の一助として、建設業界離れしつつある若者をどうやったら、また建設関連業界に引き付けることができるか。カッコいい作業着は、技能者志望の若者にも、代理人志望の若者にも得点が高いのではないかな。さらに女性労働力を引き付けるのにも、女性を満足させられるような、ファッション性に優れた作業着は有効なのではないかな。主にそういう観点から取り上げたという経緯があります。

記者A 実際問題、それはそれで確かに効果は認められますよね。本紙で取材させていただいた業界各社においても、若手の経営者の会社を中心に、作業着についてはファッション性を高めている傾向があり、若手社員の採用および定着率の向上などに、プラスアル

ファの効果を得ているという事例も、実際に少なくありませんでした。

記者B そうなんだ。だから、それはそれでいいし、何もそれを否定するつもりはまったくないんです。ただ自分たちの取り上げ方もそうだったし、取材させていただいた若手経営者のみなさんの考え方もそうだったんだけど、作業着の重要ポイントである「安全性」に関する視点が、いま考えると「何が何でも最優先」にはなっていなかったような気がするんです。

記者C もちろん安全性に関しては、国の基準だったり、業界の基準はちゃんとクリアしていて、その上でファッション性を追求するというのは正しい姿勢ですよ。私たちも、だから、安全な上にカッコいい作業着ということで、昨年秋から何度も取り上げさせてもらってきたわけです。

司会者 しかし、そこにはもう一つ、取り上げ方に大事な視点が欠けていたのではないかなということだね？

記者B まさに、その通りなんです。

☆「基本性能重視」か「多機能性能重視」か

司会者 それはズバリ、安全性についての考え方ということになるわけだね。

記者C そうです。安全性の追求というのは、とくに電気工事も含めた建設現場では、国の基準をクリアしていればいいという考え方でもいいのだろうか？ 作業着の専門メーカーとして歴史のあるX社でもY社でも、期せずしてそんな話題が出たのです。

記者A なるほどね。例えば日本の車のメーカーなんかは、安全性については、国や国際機関の基準をクリアするだけじゃなく、自社基準によってそれ以上の安全性を追求しているというメーカーが、かつてはよくあったよね。最近は検査データの改ざんなどが続出し

て、ちょっと怪しくなってきたけど（笑）。

それはともかく、環境基準についても昔からそれは同様で、そういう姿勢が日本車全体の国際的な評価にもつながっていた。日本のものづくりに連綿と受け継がれてきた、そういう自分に厳しい姿勢を是とすると、昨今の「国の安全基準をクリアしていれば……」という考え方は、少し軽いのではないかという感じ？

記者B それぞれ（笑）。

記者A 日本のカメラの優秀性も、基本性能の確かさはもちろん、安全性においても、オーバースペックなのではないかといわれるぐらい、これでもかとテストするのが日本のカメラメーカーの姿勢だった。

司会者 昔の機械式カメラは、ニコンやキヤノンだけじゃなく、たとえば「シャッターの耐久検査 10 万回実施！」なんて宣伝文句がよくあったもんだ（笑）。

記者A そのオーバースペックというのは、日本のものづくりの一つのキーワードのような気がします。値段の割には、機能も耐久性も「良すぎる」（笑）というのが特徴だったよね。

司会者 なるほど。カメラに例えると分かりやすいんだけど、今の日本のデジカメは相変わらず世界中の人気を集めているけど、いわゆる「機能的にオーバースペック」なんだよな。「ここまでやれるのか！」というような機能が満載になっている。

その点、昔の日本の機械式カメラは、耐久性（堅牢度、耐熱性、耐寒性など）だとかピントの合わせやすさだとか、レンズ構成が凝っているとか、総体的に「基本性能がオーバースペック」だった。オプションな機能よりもそっちが重視されていたよね。

記者A そういう意味では、作業着も同様の比較ができるかもしれませんね。安全性や耐久性といった「基本性能の部分」でオーバースペックになっているか、素材の心地よさやファッション性などの「機能的な部分」でオーバースペックになっているかというような感じで。

記者B それはいえるね。

☆対照的な「オーバースペック」の方向性

記者C そういう意味でいえば、X社とY社は安全性や耐久性の部分に、よりこだわって、そっち方面にオー

バースペックになるようなモノづくりをしているということなんですよ。

司会者 なるほど。その点、最近のカッコいい作業着はフィット感や色彩、カッコよさなどの機能面でオーバースペックになるぐらい得点が高いというわけだね。

記者B そうですね。

記者C しつこいようですが、これはどちらがいいと決めつけるための比較論ではありません（笑）。

記者A どちらかということ、基本性能もカッコよさも両方がオーバースペックだといい（笑）。

記者B まあ、それはそうなんだけどね（笑）。

司会者 で、その安全面でのオーバースペックというのは、具体的にどういうことなんだろう。

記者C X社Y社の方々がおっしゃっていたのは、例えば高速道路の作業員が着ている派手な蛍光色の作業着がありますよね。あれ一つとっても、日本のものと欧米のものでは作る際の基本的な思想が違うということでした。

記者B 欧米は生命の保護を第一に考えるので、記事素材も非常に高価なものを使っていると。耐寒性、耐熱性に優れ、デザインもカッコ悪さをわざわざ狙ったのかと思うぐらいにド派手な蛍光色を使うと（笑）。

正確な数値はわからないのですが、欧米の高速道路の作業員と日本の高速道路の作業員では、被事故率がまったく違うのだそうです。

記者A 日本では高速などで作業中の係員が後続車にはねられるような例が欧米より多いということ？

記者C 正確なデータの確認はできなかったのですが。

記者B 日本の作業着は全般的にそれと同じで、着心地がよく、色も多くて美しく、軽くて動きやすいんだけど、その分、国の安全基準はクリアしていても、「カッコよさを犠牲にしても安全面を」という程のこだわりはないと。それは作業着づくりの思想としてどうなのかな、という素朴な疑問っぽい感じでした。

司会者 ボルボやベンツのようなモノとして「壊れない車づくり」をする企業風土からしたら、例えば日本の軽自動車は便利かもしれないけど、衝突した時のことを考えると華奢すぎるといことなんだろうな。

（以下、次号に続く）